

心理学を志した頃を振り返って

心理学者として活躍されている先生方が、どのようなきっかけで心理学に関心をもたれ、研究されるようになったのかは興味深いことですね。学生時代や子ども時代にどのようなことを考えておられたのでしょうか？ 教育心理学，発達心理学，認知心理学，臨床心理学をそれぞれご専門とする4人の先生方に、当時のことを自由に語っていただきました。（林 創）

一般理論と個人差を巡って

大学入試センター 教授

大塚雄作（おおつか ゆうさく）

Profile — 大塚雄作

1982年、東京大学大学院教育学研究科教育心理専門課程博士課程単位修得退学。放送教育開発センター研究開発部助教授，教授，京都大学高等教育研究開発推進センター教授，センター長などを歴任し，2014年より現職（試験・研究副統括官）。専門は教育心理学，教育評価。著書は『大学教育のネットワークを創る』（分担執筆，東信堂）など。



手術入院の体験

昨年は，私は61歳の厄年であったが，頭蓋咽頭腫という脳腫瘍が発覚し，9月24日に経鼻的にその腫瘍を除去する手術を受けるという大きな出来事を経験した。今は何とか仕事にも復帰できているが，放射線治療も含めて延べ1ヵ月の入院となり，体力的に，思いのほか回復に手間取った。

頭痛などの自覚症状のないなかでこの腫瘍が見つかったのは，右目が見えにくいという症状が出たからであった。すれ違う人が10メートルくらい前に来ると，顔の部分がポカッと暗く見えにくくなるなど，部分的に異常な見え方が

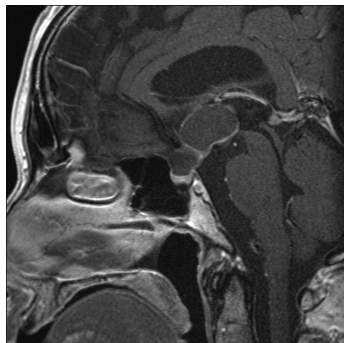


写真1 MRI画像（中央やや上部の白い線で囲まれている部分が腫瘍）

するのである。そんなことで眼科に行ってみたのだが，眼科的に精密検査もしたものの，特に異常は見出せなかった。そこで，念のために脳のMRIを撮ってみようというために，あくまで念のためにということで撮ったMRIに腫瘍の影が映っていたのである。視交叉のところに頭の中心に向かって腫瘍ができていて，それが視神経を圧迫していることで異常な見え方が生じているのではないかとということであった。8月半ばのMRIでは少し腫瘍が大きくなっており，水頭症になる危険性もあるということで手術に踏み切った。

手術後，目が覚めてみると，ものの見え方は何事もなかったかのように元に戻っていた。身をもって，目から入った光刺激は，視神経を介して脳に送られ，そこでパターン認知が行われているということを知った。心理的な認知活動は，体の構造という医学的背景に裏付けられているということである。まずは医療技術の進歩に感謝である。しかし，それと対比的に，では心理学にできることは何なのだろうか，そんなことに思いを巡ら

すことにもなった。

一般理論へのアプローチ

その意味で，「心理学との出会い」に遡ることは，私自身にとってはいい機会である。実は，同様のふり返りを，15年ほど前にも経験している（大塚，1999）。ここでは，私と心理学との接点をふり返りつつ，心理学研究における個と一般の関係について言及している。自然科学が追究する一般性を心理学でも求めながら，人を扱う以上，個の多様性を無視し得ないという矛盾をどう解消するかという問題意識である。それはまさに，私の心理学との出会いに端を発している。

私は，物理学科を卒業して，教育心理学科に学士入学をしている。そして，卒論はバイオフィードバックというテーマを選んだのだが，中味もよくわからないまま，名前の理系的な響きに惹かれたというのがその当初の理由であった。その対象として選んだのは，閉眼安静状態の時に多く出るとされる脳波アルファ波であり，それを検出して音でフィードバックすることによって，アルファ波量を

増やし、安静状態を条件付けようという、ある種、自然科学的なアプローチを志したのである。

しかし、十数名というわずかな被験者であったが、最も私を悩ませたことは、脳波に大きな個人差があったということである。アルファ波の振幅がある大きさ以上のものが出たら音を出すというのが、バイオフィードバックの基本的な考え方であるが、音など必要ないというほどにアルファ波が出続ける人もいれば、閉眼安静でいるのにほとんどアルファ波が出てこない人もいて、条件付けのスケジュールをどう設定したらよいか悩まされた。その個人差の大きさは、私にとっては、心理学の難しさに直面した最初の経験であった。

個人差への気づき

修論においても、私はやはり一般的なモデルの追究にこだわった。そのときに出会ったのが、今井四郎先生の変換構造説であった。いわゆる「パタンのよさ」を決める要因として、情報理論に基づいたパタンのもつ冗長性が取り上げられていたが、それを、パタンとして認知する人の情報変換のプロセスに着目した理論である。対称変換などによって不変のパタンは、それだけ認知の負荷が減少することで「よいパタン」という判断に結びつきやすいということである。

その頃、渡辺慧の『認識とパタン』という本に偶然出会った。そして、個体の特徴を表すいくつかの要素は同等ではなく、価値のある要素が重みづけられることによって、類似性の判断が決まり、それによってパタン認識が行われていくという考え方に強く惹かれた。変換構造説では対称軸を区別してはいなかったが、もしそうなら、人間であれば垂直方向の対称性と水平方向の対称性に差異が出

るのではないかということ、 3×3 のマトリックスに五つのドットを配したドットパターンを利用して、そのパタンのよさなどを評定してもらった実験を行った。それによって、その仮説は否定されなかったのであるが、実は、パタンのよさという表現による評定には、大きな個人差が含まれることが見出されたのである。対称性のあるパタンが当時の理論では「よい」とされていたが、それをつまらないパタンと感じて低く評定する人もいた。「単純さ」といった評定は個人差が小さくなり、「好み」などの評定の個人差はグンと大きくなる。「よさ」というのも、「好み」ほどではないにしても、かなり大きな個人差があり、この種の評定データはあくまで主観的な価値基準に基づくものであって、その個人差をどう扱うかによって結論がかなり違ってくということに気づかされたのである。

大学教育へのチャレンジ

その後、高等教育に関わる三つの大学共同利用機関を渡り歩き、2004年10月に京都大学高等教育研究開発推進センターに移ってFD (Faculty Development) 活動の推進に取り組むことになった。大学の授業を研究対象として、それをどうしたらより良いものにするができるのかへのチャレンジが新たな課題となった。授業を科学するという意味で、心理学の知見が私の挑戦を助けてくれたことは言うまでもないが、やはり悩まされたことは、卒論・修論と同様に、学生の多様性である。その個性にどう対処していくかという課題が常につきまとっていた。ある授業方法でよいという人もいれば、それは合わないという人も必ずいるのである。さらに、一人の個人のなかにあっても、時々刻々



写真2 筆者の授業風景

変わる状況や文脈によって多様な心理的状态を示すことも難しさを倍加させている。結局、その個人差や背景の違いをどう記述し、それぞれの状態の下で、心理現象をどう表現していくかがまず問われるということが浮き彫りにされた。

命を保つためには、医学の力が何といても大きいし、また、視力の回復も身体的な対処によって導かれたことも確かである。しかし、その前提の下に、何をどう見るかという点は心理学の課題であり、今後私自身がこの手術を経てどう生きていくかを決めていくのも心の問題である。その個人に特有の部分はどう解決していくかということは、生きることにあくせくしなくてもよいこれからの時代にますます大事になっていくことであろう。

心理学の課題は、多様な個人差を持ち出すまでもなく広範に山積されており、また、MRIに代表されるように、新たな測定手法もどんどん開発されていくことで、若い心理学徒がどんどん育ってもらわねばならない。また、私自身もそういう若い学徒と共に、その研究領域を活性化するのに今後も少しでもお役に立てればと思っています。

文献

大塚雄作 (1999) 「流れに身を任せて」市川伸一 (編著) 『発達・学習・教育』ブレン出版 pp.212-232.